

【論文1】

「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の目的と方法論

森 章司

【1】本研究の目的

[1] 本研究の目的を簡単に記すと次のようになる。

[1-1] 現在に伝えられる原始仏教聖典＝パーリ・漢訳の経蔵・律蔵＝は、時系列にしたがって編集されているのでもなければ、その中に歴史的記述が豊富に盛り込まれているわけではない。しかしながらその編集者たちに「釈尊の生涯」や「釈尊教団の形成史」に関する伝承がなかったということはできない。むしろ表面には現れていないけれども、そのような伝承が下敷きになれば、原始聖典が持つ「あるとき、誰が、どこで、何をした」という記述様式すら採用することができなかつたであろう。原始聖典は「誰」や「どこ」で、「何」をについては具体的に記述するのに、「あるとき」は文字通り「一時」という言葉しか用いないために、表面的には歴史的意識が欠如しているような印象を与えるに過ぎない。

本研究は、歴史的事実としての「釈尊の生涯」や「釈尊教団の形成史」の再現を放棄しているわけではないけれども、当面の研究課題としては、原始仏教聖典の編集者たちが、それらを編集したときに思い描いていたであろう、形にはなっていない「釈尊の生涯」や「釈尊教団形成史」伝承（以下これを＜釈尊の生涯イメージ＞＜釈尊教団形成史イメージ＞という。また単に、＜イメージ＞というときには、ほとんどの場合はこの両者を含むことを了解されたい）を再構築することを目的とする。

[1-2] より具体的にいうと、

- (1) ＜釈尊の生涯イメージ＞＜釈尊教団形成史イメージ＞を再構築することによる、できるだけ詳細で厳密な「釈尊年譜」と「釈尊伝」
- (2) ＜釈尊の生涯イメージ＞＜釈尊教団形成史イメージ＞にちりばめられている、できるだけ詳細な仏弟子・寺院などの「各伝」
- (3) とくに＜釈尊教団形成史イメージ＞を再構築することによる、サンガの制度や行事などがどのように形成され、整備され、布教の実を上げていったかという釈尊教団の「教団形成史」
- (4) ＜釈尊の生涯イメージ＞＜釈尊教団形成史イメージ＞をもととする、時系列にしたがって配列した漢巴対応の原始仏教聖典（経蔵・律蔵）目録

を作成する。

[1-3] しかし我々は決して「歴史的事実としての釈尊伝」を探求することや、少なくとも原始仏教聖典の編集者たちがもっていた＜イメージ＞のなかから古い部分を再現することを放棄しているわけではない。これらも将来的な展望としての視野に入れて作業していくことはもちろんである。

以上の目的を達成するためには、まず第1に＜イメージ＞を再構築する方法論が問われることになろう。また今まで釈尊の伝記を「年譜」にまで精度を高めるといった試みがなされて

こなかったために、さまざまな基本的な課題が残されており、これらをクリアしなければならない。さらに上述したように本研究が「歴史的事実」や〈釈尊の生涯イメージ〉〈釈尊教団形成史イメージ〉の中から最古の〈イメージ〉、あるいは〈イメージ〉の原形を探求することを放棄しているわけではないので、それに対処する準備もしておかなければならない。

以下これについて細説したい。